

復活節第5主日礼拝説教「神の喜びを伝えよう！」

日本基督教団藤沢教会 2010年5月2日

1イスラエルの人々は、エジプトの国を出て三月目のその日に、シナイの荒れ野に到着した。<sup>2</sup>彼らはレフィディムを出発して、シナイの荒れ野に着き、荒れ野に天幕を張った。イスラエルは、そこで、山に向かって宿営した。

<sup>3</sup>モーセが神のもとに登って行くと、山から主は彼に語りかけて言われた。

「ヤコブの家にこのように語り、  
イスラエルの人々に告げなさい。

<sup>4</sup>あなたたちは見た、  
わたしがエジプト人にしたこと

また、あなたたちを鷲の翼に乗せて、わたしのもとに連れて来たことを。

<sup>5</sup>今、もしわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば  
あなたたちはすべての民の間においてわたしの宝となる。

世界はすべてわたしのものである。

<sup>6</sup>あなたたちは、わたしにとって、祭司の王国、聖なる国民となる。

これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である。」

(出エジプト記 19章1～6節)

1だから、悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口をみな捨て去って、<sup>2</sup>生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。これを飲んで成長し、救われるようになるためです。<sup>3</sup>あなたがたは、主が恵み深い方だということを知りました。<sup>4</sup>この主のもとに来なさい。主は、人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです。<sup>5</sup>あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。<sup>6</sup>聖書にこう書いてあるからです。

「見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石を、シオンに置く。

これを信じる者は、決して失望することはない。」

<sup>7</sup>従って、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じない者たちにとっては「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった」のであり、<sup>8</sup>また「つまずきの石、妨げの岩」なのです。彼らは御言葉を信じないのでつまずくのですが、実は、そうなるように以前から定められているのです。

<sup>9</sup>しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。<sup>10</sup>あなたがたは、

「かつては神の民ではなかったが、今は神の民であり、

憐れみを受けなかったが、今は憐れみを受けている」

のです。

(ペトロの手紙一 2章1～10節)

<sup>1</sup>「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。<sup>2</sup>わたしにつながっていなながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。<sup>3</sup>わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。<sup>4</sup>わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながってなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながってなければ、実を結ぶことができない。<sup>5</sup>わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。<sup>6</sup>わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。<sup>7</sup>あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にもいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。<sup>8</sup>あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。<sup>9</sup>父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。<sup>10</sup>わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。

<sup>11</sup>これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。(ヨハネによる福音書 15章1～11節)

「わたしにつながっていなさい」

主イエスは、このぶどうの木のたとえで、繰り返し、「わたしにつながっていなさい」とおっしゃいます。「わたしから離れてはいけません。わたしにつながっていなさい。わたしの愛の内にとどまっていなさい」。それは、わたしたち人間が、本当に人間としての実りを豊かに実らせるためには、どうしても、主イエスにつながってなければならぬからです。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」(5節)。小さなこどもでも直感的に理解できる、ぶどうの木のたとえです。このたとえをお語りになられる主イエスにつながっているために、いや、「わたしもあなたがたにつながっている」(4節)とおっしゃってくださる主イエスにつながっていただいていることを確かめるために、わたしたちは、今日も、ここに集まってきました。わたしたちが枝としてつながっているべき「ぶどうの木」である主イエス・キリスト。その方をお迎えする喜びの歌を歌って、この礼拝を始めました。「ぶどうの木」である主イエスの御言葉を、わたしたちの実りを実らせるために必要不可欠な命の糧として、すでに注いでいただきました。そして、「ぶどうの木」の命そのものとして、この後、その御体と御血をいただく聖餐の祝いにも招かれています。

今、わたしたちは、ここで主イエスにつながっていることを、本当によく確かめたいと思います。間違いなく主イエス・キリストという「ぶどうの木」につながっているでしょうか。他の「ぶどうの木」につながってしまっていないでしょうか。

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」(1節)と、主イエスは、このたとえを語りはじめられました。主イエスは、もしかすると、弟子た

ちと共にぶどう園の傍らを通って歩いていたのかも知れません。主イエスは、ただ口でそう言っただけでなく、腕を伸ばして、体全体でぶどうの木の形を真似て見せたのかも知れません。そして、弟子たちも、「いいえ、イエスさま、先生のお父上は、大工でした」などと間抜けなことは言わなかったでしょう。ぶどう園を造り、ぶどうの木を育てる農夫。それは、天の父、神のことを指していると、弟子たちも皆、すぐに理解したでしょう。けれども、主イエスが、ただ「ぶどうの木」とおっしゃられずに、「まことのぶどうの木」とおっしゃられたことは、弟子たちにとって、どこか特別な響きをもって聴かれたのかも知れません。ただの「ぶどうの木」ではない。どこにでもある「ぶどうの木」ではない。「まことのぶどうの木」です。

ぶどう園の農夫は、ブドウが実れば何でも良い、というわけではないでしょう。本当に良い実が実るぶどうの木をこそ、大切に作る。「農夫が愛したぶどうの木」と言ったら大げさでしょうか。でも、要するに、「まことのぶどうの木」とは、そういうぶどうの木です。神が、ご自身のぶどう園で、つまりこの世界で、期待している実りを実らせることのできるぶどうの木。その意味で、神の御心、その喜びをあらわすことのできるぶどうの木。それが、「まことのぶどうの木」です。

### 豊かに実を結ぶための手入れ

「まことのぶどうの木」である主イエス・キリストに、つながっている。つながっていただく。わたしたちは、そのようにして、本当に神が期待していらっしゃる豊かな実りを、実らせるものとしていただきます。

それは、どのような実りでしょうか。主イエス・キリストのなさった御業、お語りになられた御言葉、それが、私たちの行いとして、私たちの言葉として、あらわされるようになることでありましょう。

そう、わたしたちは、そういう実りを、自分ではなかなか自信をもって自覚できません。でも、信仰の先達、あるいは、今共に歩んでいる信仰の仲間、もしかしたら、後から信仰に入った信仰の友、そういう人たちの中に、いくらでも見てきたのではないのでしょうか。

先日、地上の生涯を終えられた姉妹を、天のみ許にお送りしましたが、わたしたち教会の家族に向けて見せてくれたあの姉妹の笑顔、あの喜びを語る声を、わたしはいつも、主イエスと出会わせていただくような思いで拝見し、また聴いていたことを思い出します。なかなか皆さんが使いたがらない階段昇降機に、喜々として乗っていた姉妹は、何にでも喜びを見つける秘訣を、主イエスからいただいていたのではないかと思ったりします。そう、今日の御言葉の中で、主イエスが、「**わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるため**」(11節)とおっしゃった、そのとおりに、主イエスの喜びを自分の内に満たしていただいている人。それは、もちろん、あの姉妹だけでなく、わたしたちの信仰の家族の中に、あの方、この方と、思い起こすことができます。

ただ、もちろん、そういう方たちが、はじめから、主イエスの喜びをご自分の

内に満たしていらした、というわけではないでしょう。生まれつき、主イエスの御業や御言葉を、自分のものにしていらしたというわけでは、決してないでしょう。キリストを映し出す器としていただくために、その方たちは、主イエスに、本当に自分のことを委ねることをなさったのです。農夫である神に委ねて、本当に必要な手入れをしていただくことを、祈り願われたのに違いない。

ぶどうが豊かに実りを実らせるために、ぶどうの枝は、ぎりぎりまで刈り込まれる必要があるのだそうです。主イエスも、このたとえで、そのようにおっしゃられる。しかも、主イエスは、こうもおっしゃられる。「**わたしにつながっているながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる**」(2節)。

わたしたちは、いろいろな形で主イエスにつながります。礼拝に集い、讃美を歌い、聖書の御言葉を聴き、聖餐にあずかります。あるいは、「自分は、主イエスにつながっている者として、このことを実践している」ということを、証ししてくださる方もあるでしょう。けれども、主イエスは、そういう、もしかすると主イエスにつながっているためにおこなってきた「キリスト者らしいふるまい」をさえ、「それは、あなたにとって実を結ばない枝だ」と御父がご判断なさって、それを取り除かれようとされることがある、とおっしゃられるのです。

これには、わたしたちは抵抗があると思います。自分が、キリスト者として大切にしていること、こだわっていること、譲れないと思っていること。だれにでもあります。けれども、それが、神の目から見て、じつは**実を結ばない枝**かもしれないのです。神は、それを剪定しようとなさる。わたしたちは抵抗する。抵抗して、「取り除こうとしているのは、神ではなく、悪魔の仕業だ」と考えたりする。そういうこともあるかもしれませんが。けれども、主イエスは、「それをなさるのは、神だ」とおっしゃられるのです。わたしたちが、本当にキリストとつながっている者として、豊かな実を結ぶために、神は、わたしたちの「キリストとつながってしようとしているところ」をさえ刈り込んで、取り除かれる。そこに、わたしたちの、実は悪いものが隠れているからです。実りを実らせるのを邪魔しているものが、隠れているからです。

それは、痛みを伴うものかもしれませんが。それでも、わたしたちは、勇気をもって、神に手入れをしていただきたいと思います。そのようにして、キリストの喜びを、そのお顔から、そのお声から、あふれさせていらした先輩の信仰者たち、今いる信仰の仲間たちが、現にいらっしゃる。わたしたちも、その歩みを、追いかけて、共に歩ませていただきたいと思います。主イエスが確かにおいでくださるところで、教会の群れの交わりの中で、わたしたちは皆、一人ひとり、ますますキリストに似た者としていただくのです。

### 祈り

まことのぶどうの木の一枝としてください。主につながる私どもの余計な知恵も力も刈り込んでください。本当に豊かな実りだけをお与えください。アーメン